

園では非常に内向的である。

ところが、ねずみを飼いはじめたとき、

T男は他の子どもがいなくなると、箱の中に手を入れてねずみと遊び、指を噛まれても輝くような目つきで見ているのだった。

身長を計るときは、他の子どもがつかまえることができなくても、つと後から遠慮深そうに出てきて尾をつかむので、次第にこれはT男の役目として子どもたちも認めていった。テレビごっこ単元のとき、自分たちの作ったテレビのニュースにT男がねずみをぶらさげて体長を計っている絵を大勢の子どもたちが書いた。このようにしてT男はクラスから認められ、遊びの中に友だちとして誘われるようになっていった。最近では、活潑な男児のグループの中でも、かなり自己主張をするようになってきた。ねずみを仲介とする急速な社会性の芽生えに私は目をみはるばかりである。

(東洋英和幼稚園)

保育の中の童話

佐久間雅子

私の組の研究

○はじめに

童話は幼児の言語発達を助けるだけでなくその生活の内部に根をおろして、成長の糧となり「幼児期によい話を豊かに与えられて成長した人は円満である」といわれる位、その精神発達に大きな影響力を持つものです。それ故、私共は保育者として、よい話を常に最善の方法で与えたいと願わずにはいられません。そこで、私は童話(広い意味でのお話)を効果的に保育の中に活かし、子どもの生活の中に溶け込ませていくために、いろいろな与え方の工夫をして

みました。なお、対象になっている私の組は、四才児、二四名です。

○保育計画と童話

まず、子どもの発達の時期に適し、且つ、内容の傾向がたよらないように考慮されなくてはなりません。題材を選ぶには、カリキュラムに沿って季節や単元が全体の基準にはなっていますが、絶えず子どもの生活のみつめ、その時の子どもたちの状態に最もふさわしい話を見いだすように努めます。

一学期には、生活習慣を折り込んだ童話
が比較的多く、内容としては単純なくり返
しのリズム感を楽しむような短いものを取
り上げました。二学期には、活動的な行事
の多い変化に富んだ保育環境の中で、話し
いやごっこ遊びがよくなされるようになり
言語能力もぐんぐんのびたようです。遠足
や落葉など題材も豊富ですし、特にクリス
マスの時期には情緒的な美しい各国の民話
や童話をたくさん与えました。三学期に
は、知っている話を劇遊びにしたり、紙芝
居やペープサートで表現したり出来るよう
になり、皆で簡単なお話作りをすることを
試みたりして創作面にも発展させるよう
しました。

次に毎日の保育の中での童話を考えてみ
ると、その日の子どもの状態や保育計画の
流れから孤立したものにならないように、
また、それぞれの話の印象を深める為
も、与える時、場所、形式などは自由に工
夫されるべきでしょう。表現方法も場合に
よって、絵や人形、フランネルボード、黒
板などの使用によって一層効果的にもなり
ます。正しいことば遣いや気持のよい話し
方にも常に気を配りたいものです。

○話の目的による与え方の工夫
保育中にする話を目的別に次のような分
類をしてみました。

④情緒的なもの……夢を育み、想像力を
発展させる話、伝説、民話など

⑤生活習慣を正しく養う……食事、着衣、
お手伝などを扱ったもの

⑥社会性を正しく養う……友達との遊
び、働く人々のことなどを扱ったもの

⑦科学心の基礎を養う……動植物の自然
観察、雨、雪などの自然現象、乗物な
ど

⑧道徳観念の基礎を養う……善悪の正し
い判断、感謝、愛の心などを扱ったも
の

このようにさまざまな目的をもつ話の内
容をよりよく活かすために工夫してみた例
をいくつか拾ってみました。

五月一二日 「何でも食べる子」

話し合いの時、すききらいの問題を出
し、子どもたちはそのことについて興味
をもって話し出す。この時、用意してお
いたフランネルボードにいろいろな食物
を置いて切り抜いたもの（裏に綿かネル
を貼る）をつけて、どうして何でも食べ
なくては元気になれないかを話す。

（単元「元気な子ども」）

六月十九日「熊さんと子どもたち」

（アンデルセンの「絵のない絵本」よ
り）

お月様の見た話の形式で書かれたこの
本の中には幼児にも与えたい情緒的な美

しい話がいくつか出ている。(しかし原作はおとな向きなので、最後に熊がつれ去られる箇所は省いた) リズム遊びの後、子どもたちは自由な体型で教師を囲んで床の上に座り、いわゆる、炉辺童話のしみりした静かな雰囲気を作るようにした。特にこのような情緒的なものは、こうした形式で話す方がお互の心が通じ合いい、子どもたちの感情の動きをよくとらえることが出来るように思う。

一月二日「りんごとみかん」

りんごとみかんを両手に持ち、人形劇のように対話させる。

み「今日は、君の服は赤くてきれいだね。何という名前？」

り「あなたの服もきれいな黄色ね。どこから来たの？」

このような調子で二つの果物の産地、生育の違い、どんな経路で運ばれて来た

かなどを話す。この後、近くの八百屋さんへ秋の果物を見に行った。「りんごとみかんが仲良くしているよ。」などと親しげに話しかけたりしていた。(單元「秋のみのり」の中で八百屋ごっこへの発展の一課程として)

一月六日「いちょうさんさようなら」

近くの神社の境内に落葉拾いに行ったり、大きな銀杏の木から降るように葉が散って来る下で話した。

(銀杏のはっぱ達は北風にきものを黄色くそめてもらい、お母さんの木とさようならをして風の飛行機に乗ってとんでいく。途中で子どもたちの肩に止ってふざけたり、ダンスしたりしながら方々にちって、冬ごもりの虫や草の種たちのおふとんになってあげる)

話の後で子どもたちは「さよなら、さ

よなら」といいながら、舞って来る葉を受けた。「もう、おふとんになっているはっぱがあるわ」といいに来たりした。

二月三日「目や耳の不自由なお友だち」

(目を閉じてごらんさない。どんなことが困るか……先生が見えない。暗くてこわい。……耳をふさいだら……。ピアノがきこえない。お話が出来ない……。) このような経験と会話の後、盲、聾啞児の生活の写真を見せて、これらの不自由なお友だちはどんなにたいへんか、それでも一生懸命楽しく過しているようすを話す。そして、健康な目と耳を与えられていることを感謝し、こうした友だちを皆に出ることをして助けてあげる為に、クリスマスへの献金をさし上げることを相談する。(翌一月にはこれらの施設から来た礼状を子どもたちにも見せ、よい御用の出

来たことを喜び合った)

○おわりに

私は、このように保育の中の童話を広い意味に考え、扱っています。童話とは、子どもに与える話のテクニクといったら過言でしょうか。すなわち、知識や真理を、具体的に、しかも子どもの生活に共鳴するような仕方では表現することだと思えます。従って特に幼児期に与える童話は子どもの生活に立脚したものであることが望ましいと思えます。いわゆる名作童話のように整ったものでなくとも、子どもの日常生活の中でなされる会話や報告などの中にも立派な童話があるといつてよいでしょう。

しかし、私の園での調査によると、多くの母親たちの童話の概念は、先にあげた分類(A)に属するようなものであることがわかりました。ここに私共の考え方との食い違いが生じています。童話に対する固定した

考え方、または寝物語的な安易な扱い方から進んで、子どもたちの堅実な成長を助け得るような童話、そしてそれらの時と所を得た賢明な与え方について母親たちとじゅうぶん話し合つていく必要があると思ひました。

子どもの生活に最も身近なものを素材として、しかもその中に深い真理を含み、生活の知恵を教えるような童話こそ理想のものといえましょう。そしてこのような童話を通して本当の道徳感、社会感が養われていくのではないのでしょうか。最近盛んに論議される道徳教育の一つの問題点がこんなところにも潜んでいるような気がします。

特にこうした分野では、あまり目に見える反応が現われず評価もしにくいのですが、その将来に与える影響の重要さを思い、細心の注意をもって反省、研究を続けていきたいと思つております。

(雲南坂幼稚園)

◎ 幼児教育講習会

期日 昭和三十三年七月

二十一日～二十五日

(午前九、〇〇～午後四、〇〇)

会場 お茶の水女子大学講堂

科目

(第一部午前)

幼児教育の理論

(第二部午後)

幼児のリズム指導

主催 お茶の水女子大学付属幼稚園内

日本幼稚園協会